

【お茶の水地理学会講演要旨】

冒険の心、そして人生

向後 元彦

あと何年かで80歳になる。年齢のせいだろう、人生を考えるようになった。過去を振り返る。いい人生だった。楽しかった。むろん楽しいだけの人生などありえない。楽しさは、苦難からえた報酬だった。登山、探検、マングローブ…、遭遇した苦勞、苦難が想い出される。

「ガイヤ」理論でしられるジム・ラブロックはいう。「真の研究は組織に所属したらできない」。そうなのだ。定職につかない不安はあったが、自由があった。だからこそ人生を謳歌できたのではないか。

I 原点は蝶々採りと山登り

太平洋戦争がおわった翌年、小学校に入学した。東京・井の頭にある明星学園、自由教育で知られた学校である。敗戦のきびしい世の中だった。しかし新入生は校庭に咲く満開のヤエザクラで迎えられた。

学校の授業の記憶はうすい。いま思うと冒険の心が育てられたのは学校教育ではなかった。蝶々採りである。深大寺にはよく行った。お金がないのでバスには乗れない。吉祥寺の自宅から歩く。暑い夏の日、ひとりで一日中蝶を追った。いまも鮮明におぼえているのがアカタテハである。どこにでもみられた普通種だが、ニラの花にとまるこの蝶をみつけ、おどろいた。なんて綺麗なのだろう。赤を主体に、茶色、黒、そしてさりげなく青の線まであるではないか。色彩と文様のすばらしさに魅了された。

レベルはまったくちがうが、英国の博物学者アルフレッド・ウォーレス（1823～1913、いうまでもなくダーウィンとならび進化論をとらえた人物）の逸話がある。インドネシアのバチャン島で、みたこともない超大型（前翅長 80mm）の極彩色の蝶をとらえた。そのときの感動を日記に書いている。あまりの興奮で熱をだし、何日か寝込んでしまったというのだ。蝶の名はクロエサストリバナエゲハ *Ornithoptera croesus* (Wallace, 1859)、のちに新種として記載される。

高校では山岳部にはいる。下界ではなじみの薄い蝶にあえた。夏の奥秩父縦走、花にあつまるアサギマダラの乱舞をみた。夢のような光景だった。

山にのめりこむ。単独行の南アルプス。修学旅行をさぼり、その費用が旅費になった。残雪の北岳の姿が心に残った。秋の後立山縦走には同行者がいた。1年部員の土屋正忠である（政治好きのかれは、のちに生徒会長、武蔵野市長、国会議員になる）。これも学校をさぼった山行だった。重いザックを背負い岩稜をこえる。黒部峡谷をへだてた新雪の劔岳・立山に感動する。高校生には背伸びした登山だったが、思い出にのこる山行だった。

II 大学山岳部・しごき・冬山

学校をさぼった結果はすぐにでた。大学受験に失敗、浪人になる。予備校に通ったのは、学割がもらえたからである。安く山に行けた。山に行く日がさらにふえる。翌年、東京農大を受験したのは、2つの理由からである。ひとつは母親の一言。「学校なんてどこでもいいのではないか」。たしかにこのままでは何年浪人がつづくかわからない。もうひとつは登山である。深田久弥『ヒマラヤ 山と人』（1956、中央公論社）をよみ、大学山岳部にはいつてヒマラヤに行く、と決めた。農大は遺書『風雪のビバーク』で知られる松濤明が籍をおいた大学でもあった。受験をしたその日、その足で山岳部の部室をさがし、入部の申し込みをする。

大学では山登りであげられる。年100日以上は山のなか、当然、授業にでるヒマはない。大学山岳部は入ってみてわかったことがある。高校山岳部とはまったくちがうのだ。戦後20年ちかくなるというのに、なんということか。まだ帝国陸軍のなごりがあったのだ。1年部員はバカ重いザックを背負わされ、夏の北アルプス全山縦走をした。そこで待っていたのが「しごき」である。軍隊そのもの。1年部員は、軽装の2年部員に追い立てられる。登りはつらい。だが下りはさらにつらい。重いザックを背負ったままで、急な山道を走らされるのだ。3年、4年部員は、それを見ても、知らん顔だった。

それでも山は魅力的である。岩登りや雪渓歩きの技術をおぼえた。冬山はヒマラヤをモデルにした極地法登山である。1年生のときは豪雪の大熊山・大日岳から劔岳へ。2年生のときは槍ヶ岳北鎌尾根の岩稜から奥穂高岳を往復した。いずれも厳冬期初トレースとして記録が残

っている。しかし、こんな山登りをいくらしてもヒマラヤには行けない。海外渡航がきびしく制限されている時代だった。どうやって日本を離れられるか。それが最大の難関なのにだれも考えてはいない。考えようともしない。

悩んだ。ヒマラヤに行けない山岳部なんか、なんの意味があるのか。しかし山岳部をやめたら、大学にいる意味もない。楽観的・極楽トンボを自認するぼくも、このときだけは心底悩んだ。

Ⅲ 探検部設立、そしてヒマラヤへ

光明をつかんだ。探検部という存在を知ったのだ。京都大学の本多勝一らは山岳部から探検部を設立させ、その年に西カラコラム・東ヒンズークシ探検隊を派遣した。そうなのだ。探検部をつくれればよいのだ。京大から遅れること5年の1961年、農大探検部が誕生する。翌年、幸運にめぐまれ、ネパールに行くことができた。ただし目的は登山ではなく農業調査。ヒマラヤ山麓の高山帯からインド平原につづく熱帯までであるネパールには多様な農業形態がある。それを研究する——ぼくの苦肉の策だった。

うかつにも最近まで気がつかなかったことがある。3人のメンバーからなるネパール農業調査隊（リーダーの栗田匡一農大講師、インド在住の島田輝男、そして学生のぼく）は百万円単位のお金が必要だった。その大金がどこからでてきたのか。なにも聞いてはいなかったが、杉野忠夫教授（当時農業拓殖学科長）だったことは間違いない。先生は学生たちの情熱にこたえ、探検部誕生の産婆役をひきうけてくれた。そしてぼくの「ヒマラヤ」のためにも、惜しめない支援をしてくださった。それなのに、ことばで感謝を伝えたことは一度もない。なんと恩知らずな若者だったことか。

1年4カ月のネパールだった。初めての著書『一人ぼっちのヒマラヤ』（1964、ベースボール・マガジン社）がだせたのは、ひとえに深田久弥さんのおかげである。出発前、深田さんは「日記をつけろ」と助言を与えてくれた。それがあったので原稿が書けたのだ。さらに深田さんは、いくつもの出版社にあたってくれ、出版まで世話してくれた。

この「ネパール」を契機として、2つの活動が生まれる。ひとつは、農大山岳部によるトゥインズ登山隊（1963年）である。ぼくは同隊のメンバーとして招待され、7,000m峰登山を経験する。また山岳部はこの遠征を契機に、その後、数多くのヒマラヤ登山隊をだすようになる。もうひとつは栗田先生を中心とするラブティ実験指導農場

（1964～1972年）である。このプロジェクトには多くの探検部OBも参加した。7年間つづき、その後、ネパール政府に移管され、日本政府のODAとして技術協力が実施されることになる。

ぼく個人としてはなにができたか。自慢したいことが2つある。ひとつはチベット国境にそってバルン氷河からカンチェンジュンガ氷河まで踏査したこと。シコクピエとヤクの干し肉といった粗末な現地食をたべ、とまらない下痢をおさえての毎日だった。途中の村でチベット人の少年1人を雇い、ともに重いザックを背負った。5,000mの峠をこえ、氷河をあらく。このルートは史上3番目の踏査だった。ぼくのまえにいたのは、英国のチャールズ・エヴァンス、ニュージーランドのノーマン・ハーディーといった著名な登山家だった。もうひとつはトゥインズ（7,350m）の7,000mまでを経験したあと、シェルパ1人をつれて、ツイシマピーク（6,390m）と同南峰（約6,300m）の初登頂をしたことである。憧れていたティルマンヤシプトンとおなじく気軽にヒマラヤ登山ができたのである。

Ⅳ 南極最高峰ヴィンソン・マシフ

1964～1966年、南極大陸最高峰ヴィンソン・マシフ（4,897m、当時は5,140mとされていた）初登頂をめざす準備で明け暮れた。世界六大陸中で唯一登られていない大陸の最高峰だった。その山は、登られていないだけではなく、存在すらもよく知られていなかった。準備は航空写真や文献の調査からはじまった。

あつまった若者は10余名、みなヒマラヤやアラスカなどの登山経験者である。ちなみに出身校を列記すると、九大、京大、同志社大、大阪市大、東京都立大、東海大、農大、北大の8校となる。西堀栄三郎さん（第一次南極越冬隊長）が相談役をひきうけてくれた。当時西堀さんは仕事で多忙をきわめていた。にもかかわらず応援してくれたのは、この企ての評価とともに若者たちの情熱を買ってくれたからだろう。西堀さんは云った。「きみたちは登山における経験も能力もある。問題はいかに南極にたどりつくか、だ」。

高名な南極探検家フィン・ロネを日本に招待して相談にのってもらった。ロネの助言でデンマークの砕氷船をチャーターできることになる。だが億単位の費用が壁になった。新聞社支援の内定もあったが、それではとても足りない。アメリカのグループとの合同も考え、手紙で連絡をとりあった。国産の航空機YS11をとばす方策も検討した。最後の手段はチリ海軍の援助をうけるという作戦。パーマ半島まで送ってもらって、そこからヴィンソ

ン・マシフに近づく。川井康夫(同志社大学OB),そして新婚間もない紀代美とぼくが先発隊をかってでる。日本の貨物船がサンチアゴまで無料でのせてくれることになっていた。

『探検No.10』(京大探検部)の「あとがき」で本多勝一さんが書いてくれたエールが忘れられない。「向後元彦氏の『ヴィンソン・マシフ』(の原稿)を受け取ってまもなく、アメリカ隊によるこの山のアタック計画が報じられました。長年研究を進めてきて、実行段階に移る寸前、アメリカ隊に先んぜられた向後氏らのグループの心情は、察するに余りあるものがあります。アメリカ隊の失敗を祈る次第です。」

本多さんの祈りもむなしく、ヴィンソン・マシフ初登頂はアメリカ隊のものとなる(1966年12月)。あとで知ったことだが、アメリカ隊はふたつのグループ(ひとつのグループはぼくらと連絡をとりあっていた)が合併し、ニコラス・クリンチをリーダーとして全米規模の登山隊を組織していたのだ。かれらは米空軍の支援をうけ、大型輸送機ハーキュリー(C130)でヴィンソン・マシフ直下に到達する。そして苦もなく初登頂を果たしたのだ。

V 家族ぐるみの探検

紀代美と結婚したのは南極登山計画の最中だった。それから半世紀以上がすぎた。ときどき思ったりする。かくも長いあいだ一緒にいられたのはなぜか。

共通の価値観を理由とすることには意義がない。そのため変化にとんだ人生が展開し、あきることがなかったのだ。そもそも結婚式から世間的ではなかった。式場は四番町の立派な西洋館、三木武夫(のちの首相)の事務所である。身分不相応な会場は探検部後輩の高砂昭文の計らいだった(高砂は三木武夫の書生をしていた)。貧乏な先輩のために世話をしてくれたのだ。新郎新婦の仲人は深田久弥・志げ子夫妻が快くひきうけてくれた。会費制で集まってくれた招待客は山と探検の関係者がめだった。そして花嫁のお色直しは深紅のサリー姿、これも個性的だった。

せっかく就職できた勤め(JETRO)も1年あまりでやめた。南極最高峰登山計画のためであったが、紀代美の反対はなかった。計画の破たん、そしてふたりは長い旅にでた。

ネパールではヒマラヤのトレッキング、パキスタンではヒンドゥクシュの6,000m峰を初登頂とカフィリスタン探検、さらにアフガンからイラン、トルコへ、バス、ジープ、汽車をのりつぐ貧乏旅行……

おちついたのは英国だった。そこから紀代美が望んで

いた「家族ぐるみの探検」がはじまる。長女の江美は紀代美の胎内で英国一周の自動車旅行を経験した。誕生2カ月もたたないうちに、シャモニーの針峰群をながめ、ユングフラウヨッホの氷河の上につつ(もっとも本人はいつも紀代美に抱かれて、またはキャリーコットのなかで眠っていたのだが)。紀代美と江美はレイキャビック(アイスランド)、ニューヨーク、サンフランシスコを経由して帰国した。いっぽうぼくはひとりフォルクスワーゲンを駆ってテヘランに向かう。仲間の星野紀夫が組織した「中央アジア探検隊」に合流するためだった。その半年間、母子は実家の世話になっていたという。育児が二人の生き方を分けた。

それから東京生まれの次女・美陽を加え世界をあるいた。両親の好みで辺境といわれる土地が中心だった。おもな旅先をあげれば、ミクロネシア・トラック諸島、インドネシア・小スンダ列島(地元の小さな帆船での航海が忘れられない)、ヒマラヤに沿ってネパールとインド、小チベットといわれるインド・ラダク地方、といったところ。それらの旅については紀代美が書いた『エミちゃんの世界探検』(1972,毎日新聞社)と『あるくみるきく』(日本観光文化研究所発行の雑誌)のいくつかの特集に詳しい。機会をあらためて話すことにしたい。

VI マングローブの宇宙にあそぶ

「マングローブ」にかかわって何年になるだろう。37歳で始めたから40年にもなる。なにができたのか。3つのステージで考えてみたい。はじめの10年間はアラビア半島である。不毛の沙漠海岸にマングローブの森をつくらうとした。だれもがなしえなかった難問だった。しんどかった。けどおもしろかった。おもしろさを一言でいえば、チェリーガラードのいうところの「知的冒険の肉体的表現」だったからだ。その一部始終は『緑の冒険—砂漠にマングローブを育てる—』(1988,岩波新書)で書いた。興味があれば読んでいただきたい。

第2のステージはビルマ(現在はミャンマー)である。ひよんなことでこの国に通うことになる。UNDP/FAOの仕事だった。荒廃したマングローブ林の修復方法をさぐるためだった。具体的には植林方法を確立すること。ビルマ森林局が10年をかけても解決できなかった難問である。

1年目はイラワジ河口とヤカイン州の調査をする。乾季、現場を訪れてことばを失った。マングローブを失った土壌は乾燥し、ひび割れすらみられるのだ。どう考えてもマングローブがそだつ環境ではない。

アラビアの経験が役立つ。つまり、生育環境をしらべ、その環境でそだつ樹種を見つけ、育て方の方法を確立す

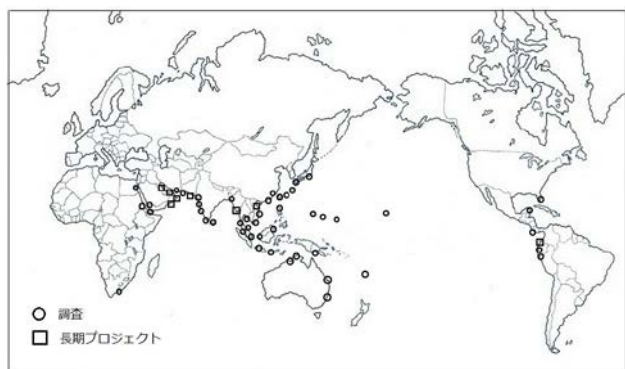


図1 わたしの足跡
—マングローブの調査と長期プロジェクト (1978～2017年)



写真1 ペルーアンデス、パストルリ氷河の前にて (2016年7月)

る。イラワジ河口の環境でいえば、①大河の河口、②明確な雨季と乾季、③デルタ地形、となる。潮汐、水の塩分濃度、気候、土壌などの調査をおえて、栽培試験をすることにした。

わずか2年で解決のメドが見ついたのは、相棒となった森林官のおかげである。ウィンマウンとモンモンタンのふたり。かれらの熱意には驚かされた。その背景には森林局の失敗の無念さがあったのだ。

アラビアとビルマの「マングローブ」は苦難の連続だった。不安におびえた。冒険に値する行為だったと思う。それにくらべて次のステージとなるNGO活動は冒険度がひくい。皮肉なことに、マングローブの植林技術が身についたこと、さらに社会的変化が影響した。地球環境問題の一つとして「マングローブ」が注目をあつめるよ

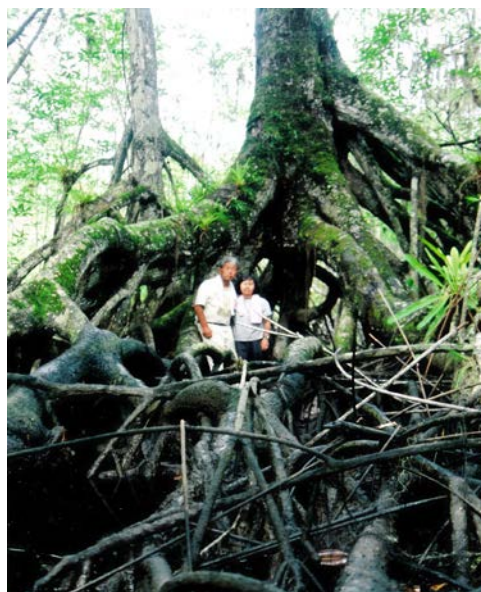


写真2 エクアドル、マングローブ原生林にて (2002年8月)

うになったのだ。順風のなかの行為はおもしろみに欠ける。

NGO活動としてのマングローブは3つのプロジェクトである。エクアドルは10年間実施した。継続中のベトナムは24年目、ミャンマーは18年目をむかえた。

安定した活動に関心がもてないのは、どうやらぼくの性格らしい。近年、あらたなマングローブの課題をみつけた。マングローブの古生物学とマングローブ大学である。紀代美と一緒にしておもしろがっている。前者は2009年、エジプトの砂漠からはじまった研究である。これまで論文はいくつか発表した。後者は2001年、シュピッツベルゲンを訪れたときに浮かんだアイディアだ。ゆっくりのんびり、すこしずつ成果をあげている。形になるには時間がかかる。まだしばらくは人生を楽しみたい。

付記：向後(深津)紀代美氏は本学地理学科11期卒。日本観光文化研究所、北京日本学研究中心、東北学院大学助教授を歴任。装身具を指標とした文化地理的な地域研究。「お茶の水地理」(Vol. 24 1983, Vol. 26 1982)、共著『粉食文化と肉食文化』(1981柴田書店)などがある。

元彦氏については、本誌「お茶の水地理学会活動報告(2016年度)」を参照。

こうご・もとひこ
マングローブ植林行動計画・相談役

An Adventurous Spirit and Life

KOGO Motohiko (Action for Mangrove Reforestation)